

平成十八年十一月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編 島大言語文化 第二十一号 抜刷

碧雲湖棹歌訳注（一）

要
木
純
一

碧雲湖棹歌訳注（一）

要 木 純 一

はじめに

明治三十六年（一九〇三）設立からほぼ四十年にわたって続いた剪淞吟社せんしゅうぎんしゃは、松江を本部とした漢詩人の結社である。その歴史は故入谷仙介博士が調査してまとめられた。（入谷仙介・大原俊二共著『山陰の近代漢詩』山陰の近代漢詩刊行会 二〇〇四）剪淞吟社は、衰退しつつあった漢詩・漢字の復興を図って、様々な活動をした。その中の一つが、宍道湖に浮かぶ嫁が島に詩碑をたてることであつた。当時、宍道湖の船遊びはさかんで、嫁が島を訪れる客も多かった。剪淞吟社の同人たちは、この観光スポットに、明治大正時代屈指の漢詩人永坂石埭ながさかせきたの詩碑を建てることを計画した。石埭は名古屋の人、吟社の中心人物であつた横山耐雪の師匠である。時に明治四十四年（一九一一）。翌大正一年（一九一二）石埭、松江訪問。大正三年（一九一四）、石埭は宍道湖に題材を求めた『碧雲湖棹歌』（せんしゅうこ）を発表。「碧雲湖」は宍道湖の雅名。「棹歌」はさおで舟を進めるときの民謡調の舟歌。翌大正四年（一九一五）にこの詩碑が建立され、除幕式が開かれた。同時に全国の漢詩人たちに働きかけて、『碧雲湖棹歌』に和する次韻の詩を求めた。百家以上から唱和詩が寄せられ、永坂石埭の原詩とともに、『碧雲湖棹歌』としてまとめられた。それらの詩は、剪淞吟社の機関誌『剪淞詩文』第五編に附録として収められている。（島根県立図書館蔵）。以上、入谷仙介著『出雲漢詩散步』（たたら書房 一九八七）参照。

今では忘れ去られた、これら珠玉の漢詩群を、多くの人に読んでいただきたくて考えて、訓読、口語訳、注釈をつ

けてみた。浅学非才、しかも日本漢詩が専門でないため、大きな間違いが多いかと思う。指摘を受けて今後正していきたい。そのために、間違いがあれば間違いであることが明々白々にわかるように、主語や状況や論理をはっきりさせ、あいまいさや逃げ道の無いような訳文を目指した。ただ、漢詩特に七言絶句は、主語や状況や論理を、あるいはわざと曖昧模糊にしたり、あるいは読者の判断にゆだねるようにしたり、というような作り方をする場合が多い。訳者は、野暮を承知で、論理を通して、ほとんどの作品に一つの解を定めたが、もちろんほかの読み方を排除するものではない。

典故の指摘は最低限度に抑え、厳密を期さなかった。複数の作者が同一の語を用いていることから見ると、おそろく韻書や作詩指南書のたぐいを参考にしたと思われる。必ずしも典故の原文を知っていたとは限らない。順番がわかりにくいので、便宜的に各首の題下に括弧して通し番号を付けた。同一作者が複数の作品を作っている場合も、わかりやすくするために括弧して、題名、作者名を重ねて示し、其一、其二というように順序を示した。表記は常用漢字体で統一。一部筆者の趣味で旧字体を用いている。正確な表記は原文に当たられたい。訓読も訳者の趣味が濃厚である。現代仮名遣いで統一。漢字の読みは漢音にこだわらず吳音、慣用音を採用しているところがある。

各作者の略歴を付すべきだが、みな当時の名士であるはずなのに、調査不足により不明な点がいくつもあり、今回は見送った。本当は、作者がどのような生涯を歩み、作詩の時点でのどのような境遇や作風であったか、また剪淞吟社とどのような関係があったか、宍道湖を実見したことがあるかどうかは、解釈上重要である。徹底的に調査して、次の機会にまとめたい。

訳注

碧雲湖棹歌 石埭 永坂周 尾張人 住東京 (一一)

美人不見碧雲飛 美人は 見ず 碧雲は 飛ぶ

惆悵湖山入夕暉 惆悵す 湖山の 夕暉に入りに

一幅淞波誰剪取 一幅の 淞波 誰か剪取したる

春潮痕似嫁時衣 春潮 痕は似たり 嫁する時の衣に

この詩が、嫁が鳥詩碑に刻まれているものである。題の下に号、氏名。更に、出身地と現住所が並べられている。出身地と現住所は、原文では小字二行。

嫁が鳥伝説の美女はもはや跡形もなくなつて見ることはできず、湖の反射で緑に映えた雲だけが空を飛んでいる。ああ心が結ばおれることよ、湖の周りの山々が夕映えにのみこまれていくのを眺めていると。一幅の絵のごとき中国の淞江の波を、誰がきりとつて眼前の風景に持つてきたのか。(そのように、あなた方剪淞吟社の同人たちも、中国の伝統をこの宍道湖の畔の松江に、移植発展させようとしているのだな) 春の潮が引いた後の嫁が島の砂辺に花びらが残っている様が嫁入り衣裳のあでやかな模様に見立てられる。(剪淞吟社の発展を祝するかのようだ)

『碧雲湖棹歌』の世界では、嫁が鳥伝説について、嫁が鳥が宍道湖に身を投げた美女の亡骸を載せて浮かび上がったという点だけ知つておけば足りる。姑のいじめがあつた等の経緯はどうでもよくて、嫁が鳥、さらには宍道湖全体が、神女の化身であるという見立てを、様々な角度から試みているのである。ただ、この詩は、美女そのものを詠まない。彼女は「不見」の状態になつてゐる。また、正にこの作品の碑がたてられるはずの嫁が鳥も直接には詠まない。そのものに言及しないことによつて、そのものの神性、超人間性を逆に際立たせようとする手法であらう。

この詩には入谷博士の訳注がある。前掲『出雲漢詩散步』所収のものを、後に参考として引いた。これ以上はない名訳で、永坂石埭の意図を正確に読み取つておられる。それなのに、敢えて別解の拙訳を示すのはなぜか。それは、この詩が、本来たくさんの詩人に和することを求めるという条件で作られたからである。そのためにわざと解釈の余

地を残して、思いもかけぬ面白い和詩が寄せられるのを期待した節があると思うのである。百人余の詩人の中には永坂石球の本来の意図から離れて、私のように解釈したものもいたのではないか。

起句。「美人は碧雲の飛ぶを見ず」と読む可能性も考えたが、リズムがよくないようである。「碧雲」は、宍道湖が別名「碧雲湖」と呼ばれることから用いた。『出雲漢詩散步』によれば、「幕末後期の漢詩の大家、菅茶山（一七四八—一八二七）の命名と伝えられる」。そして「碧」について、入谷博士は「碧はみどりではなく、白雲の日光を受けて鮮やかに輝くさまを形容する」といわれる。訳者は、湖水や周囲の山々のみどりに映えて、エメラルドグリーンのようになった雲と考える。むろん実景ではなく、詩的雅語である。「碧雲」の語にそのようなイメージを抱く読者は決して少なくあるまいと思う。

承句。「惆悵」は双声の擬態語。恨み嘆くさま。確かに、入谷博士訳のように、「暉」字で押韻させるための一種の倒置法と考えて、夕日が湖山に入ると読むのが、妥当な解釈と思う。ただ、「夕暉」を夕日の光線、または反照と考えて、そのような日没時独特の、人をして「惆悵」せしめるような雰囲気の中に、湖山が入っていくという解もあり得るかと思つたのである。訳者自身も強引な解釈であることは自覚している。

転句。入谷博士は「淞」を松江や宍道湖の雅名として解釈しておられる。入谷博士訳の「この湖水の波を一幅切り」とるとするのは、どういうことであろうか。汽水湖である宍道湖の潮が引いてきたことか。嫁が鳥がそこだけ波を切りとつたあとのようなのだというのか。それとも、一幅の絵のような風景だということなのか。おそらく、いろいろな解釈の余地をわざと残された訳だと思ふ。訳者は、「淞」を本来の意味、すなわち中国江南の「呉淞江」として解釈し、剪淞吟社の発展を寿ぐ気持ちに裏にこめていると考えた。（入谷博士訳も、宍道湖の波をきりとつて剪淞吟社同人が美しい詩の材料にするという含意がありそうである）「剪淞吟社」の名は、森槐南が、杜甫の「戯れに山水を画く図に題する歌」の「焉ゆか井州の快剪刀を得て、呉淞半江の水を剪取せしならん」を用いてつけた。杜甫のこの詩は、呉淞江を実見したわけではなく、あくまでも絵について詠んだ詩であることに注意。「一幅」の語のよつてきたるゆえんである。

結句。「春潮の痕」を入谷博士訳は潮が引いた後の「水」に残った痕ととり、拙訳は「岸」や「砂浜」に残った痕としている。いずれにせよ、実景かどうかはともかく、花びらが散っていないことには「嫁時衣」とはいえないであろう。

上平五「微」韻。韻字の「飛」「暉」「衣」は暗いイメージの詩にはなりにくい字で、このあたりにも、剪淞吟社の嫁が鳥詩碑建立を寿ぐ方向の和詩を期待する、永坂石埭の意図が感じられる。

《参考》入谷博士訳（前掲『出雲漢詩散步』より）

美人は見えず 碧雲飛ぶ／惆悵す 湖山 夕暉の入るに／一幅の淞波 誰か剪取せしや／春潮 痕は似たり 嫁時の衣

その昔、この湖に身を沈めた美女があつたということだが、その美女の姿は見当らず、キラキラと光る雲ばかりが空を飛び、湖のかなたの山に沈む夕日に私の心は結ばれる。この湖水の波を一幅切りとっていったのは誰だろうか。花びらを浮かべた春のうしおのたたずまいは、あの美女の嫁入りの衣裳にさも似ていることよ。

碧雲湖棹歌次永坂石埭原韻 中洲 三嶋毅 備中人 住東京（二）

関関唱和睽鳩飛

関関と 唱和して 睽鳩は飛ぶ

激盪金波蘼落暉

激盪たる 金波は 落暉を蘼す

想見八雲神殿裡

想見す 八雲の 神殿の裡

秋陽曝出合歛衣

秋陽 曝し出だす 合歛の衣

『碧雲湖棹歌。永坂石埭の原韻に次す』。これ以降が次韻の詩。起句、承句、結句の末に、それぞれ永坂石埭が用いた「飛」、「暉」、「衣」字を置かなくてはならない。

クワンクワンと鳴き合つて、みさごが飛ぶ。何とも仲の良いこと。金色に輝くさざ波がゆらゆらとする中を夕日が没していく。そんな湖畔で思い浮かべる。人間の結婚を司る、八雲立つ出雲八重垣の神殿で、夕陽のもと、結婚式用の服をすべてさらし終えて準備ができた光景を。(剪淞吟社発展及び石埭詩碑建立をことほぐ氣持を託するか)

起句は、『詩経』周南『閟雎』の「閟閟たる雎鳩は、河の洲にあり。窈窕たる淑女は、君子の好逑(よきつれあい)」より。承句、「激瀧」といえば蘇軾『飲湖上初晴後雨』の第二首「水光激瀧晴れ方に好し」。さざ波の揺れ動くさまを表す疊韻の擬態語。「金波」、金は五行で秋に当たる。転句、「八雲神殿」は現実のどこそこの神社ではなく、六道湖から南の山を眺めて、素戔嗚尊の鎮座する世界を想像しているのだろう。あるいは、時間の觀念を超えて(無視して)、素戔嗚尊と奇稻田姫がこれから夫婦となつて楽しい日々を過ごすだろうというのだろうか。結句、「合歡」は喜びをともにすること、多く男女夫婦が仲むつまじくすること。「合歡杯」や「合歡被」等の熟語がある。

全 青萍 末松謙澄 小倉人 住東京(三)

新婦洲前一鶴飛

新婦しんぶ 洲前しゅうぜんに 一鶴いっかく飛とぶ

可憐新婦怕斜暉

可憐あわれ 新婦しんぶ 怕おそむ 斜暉しやけいを 怕おそるを

秋風十里二十里

秋風しゅうふう 十里じゅうり 二十里にじゅうり

雲影東西趣郎衣

雲影うんえいは 東西とうざいして 郎ろうの衣ころもを 趣おう

〔上〕は「同」。〔二〕の『碧雲湖棹歌次水坂石埭原韻』と題が同じということ。

嫁が鳥の前を一匹の鶴が飛んでいく。ああかわいそうに、お嫁さん(嫁が鳥神女)は日が斜めになっていくのを恐れている。(時間がどんだんたつていくのに、夫には会えない)秋風が十里も二十里も吹き抜けていき、お嫁さんの願いがこもった雲の、湖面に映つた影が、夫の姿を求めて、東へ西へと追いかけていく。

転句は、杜牧『贈別』「春風十里揚州的路 珠簾を巻き上ぐるも絵て如かず」の換骨奪胎か。転句の平仄は「○○

邵雍『首尾吟』のうちの一首に「上陽宮殿は空しく堵を遺し 金谷園林は但だ暉を落とすのみ」とある。

全 香国 土居通豫 土佐人 住東京(六)

夢向碧雲湖上飛

夢は 碧雲 湖上に向いて 飛ぶ

扁舟何日棹清暉

扁舟は 何れの日に 清暉に棹ざさん

黄昏新婦洲辺月

黄昏 新婦 洲辺の月

幾照詩人澆酒衣

幾たびか照らせしならん 詩人の 酒に澆りたる衣を

未だ宍道湖に行ったことのない私だが、夢だけは宍道湖に向かつて飛んでいる。いつになったら、清らかな陽光の下、小舟に乗って宍道湖を楽しむことができるだろう。たそがれどき、嫁が鳥のあたりの月は、詩人たちの酒がこぼれてしみのついた服を、これまで何回照らしたことであろうか。いつか、その宴の末席に連なりたいことである。

澆は音ワ。汚れる(す)、染まる(める)の意。韓愈の『合江亭』詩に「願わくは巖上の石に書かん、泥塵をして澆さ使むる勿れ」。

全 冷灰 江木衷 長門人 住東京(七)

魂向碧雲湖上飛

魂は 碧雲 湖上に向いて 飛ぶ

舟中有物月沈暉

舟中に 物有り 月は暉を沈ましむ

空鈎意釣所何得

空鈎 意釣は 何をか得る所ぞ

一夢帰来香滴衣

一夢 帰り来れば 香は衣に満つ

魂がまだ見ぬ宍道湖めがけて飛んでいく。(宍道湖に恋いこがれて夢にまで見た)そこで私は見た、舟の中に何か

があつて、月が静かに照らしているのを。精神力による、目に見えない釣り針でそれを釣つてみた。いったい何が釣れたのだろうか。夢から覚めてみれば、かぐわしい香りが衣に満ちていたことだ。嫁が島伝説の女だったのだろうか。思わせぶりの詩。蘇軾「看棋」詩に「空鈎意釣、豈に魴鯉に在らんや」。「所何得」(●●●)は「何所得」(○●●)とあるべきところ。文法には合わないが、訓読でごまかして、平仄を無理矢理合わせた。(それでも孤平だが)一種の言葉遊びか。

全 九峰 高嶋張 長門人 住東京(八)

碧雲湖上夢空飛 碧雲 湖上に 夢は空しく飛ぶ

恍看烟松带落暉 恍として看る 烟松の 落暉を帯ぶるを

問勝何時嫁洲畔 勝を問うは 何れの時ぞ 嫁洲の畔

春波一棹灑吟衣 春波 一たび棹させば 吟衣に灑ぐ

宍道湖に夢だけは赴くのであるが、未だに訪れることができない。夢のなかで、もやのかかった松に落日がかかっているのが、ぼんやりと見えたような気がする。何時になったら嫁が島のほとりに名勝を訪ねることができようか。春の波に船頭が船竿をさして、詩を吟ずる私の衣にしずくが飛びかかる情景が思い浮かぶ。

全 裳川 岩溪晋 丹波人 住東京(九)

梭声札手中飛 梭の声は 札札として 手中に飛ぶ

新婦下機将夕暉 新婦 機を下れば 将に夕暉ならんとす

不是天孫工織錦 是れ 天孫の 錦を織るに工なるにあらざるも

白雲裁作大仙衣 白雲もて 裁ちて作す 大仙の衣

シャツシャツと音をたてて、梭が手の中で飛ぶように動いている。新婦が機仕事を辞めて、織機から降りてきた。折しも夕日が照ろうとしているところ。(昼中活動していた嫁が鳥が、夕暮れになって眠りにつこうとしているさま) 天上の織り姫のように五色の錦を織るのが上手だというわけではないが、白い雲を裁断して、仙人の如き大山の衣を作り上げたのだ。

天孫は、織女星のこと。白雲は仙界の象徴。「莊子」「天地篇」「彼の白雲に乗じて、帝郷に至る」。大仙は伯耆大山の雅名、また擬人化。嫁が鳥から大山まで白雲がずつと延びているのか。あるいは遠隔能力によつて、嫁が鳥が大山に白雲を生ぜしめているということか。いずれにせよ、実景ではなく頭の中で作った句。錦を織る織女の派手にさに対して、黙々と質素な白い衣を織る新婦＝嫁が鳥という見立てであろう。

仝 東郭 落合為誠 肥後人 住東京(十)

桃花灼灼燕子飛

桃花は 灼灼として 燕は于き飛ぶ

晴日湖波漾碧暉

晴日の 湖波は 碧暉を漾わす

新婦洲辺閑打漿

新婦 洲辺に 閑かに槳を打つ

風情依約旧鳥衣

風情は 依約たり 旧き鳥衣に

桃の花は輝くばかりに咲き誇り、燕が連れ立って飛ぶ。嫁が鳥伝説の新婦の結婚の時もこのように自然が寿いだことであろう。晴れた日の宍道湖の波が緑色に光る太陽の反射をゆらゆらさせる。嫁が鳥のそばでのんびりと權をこいでいると、あたかも、新婦の昔の夫になったような趣がある。名門にふさわしく黒い服を着た貴公子であったその夫に。(別解。眼前を飛んでいるこの黒い燕の姿に、新婦が結婚した頃飛んでいたに違いない燕が重なり合つて見えることだ)

「桃花灼灼」は『詩經』周南『桃夭』「桃の夭夭たる、灼灼たり其の華」を典故とする。新婚を寿ぐ詩。「燕子飛」

も『詩経』邶風『燕燕』「燕燕于飛、其の翼を差池す」を用いた。『燕燕』詩自体は新婚を寿ぐ詩とはいえないが、燕は夫婦仲のよい象徴。例えば李白『双燕離』「双燕復た双燕、双飛して人をして羨ま令む」。悲劇のヒロインの嫁が鳥伝説の新婦も、新婚の頃は夫と楽しい日々を送ったこともあつたらう。結句の「依約」は本来「ほんやり、かすかな」という意味の双声の擬態語。「あたかも……のようだ」というニュアンスをも持つようになった。「烏衣」は劉禹錫の「烏衣巷」。「朱雀橋辺に野草は花さき、烏衣巷口に夕陽斜めなり。旧時の王謝の堂前の燕、飛入す尋常の百姓の家」を意識するであろう。金陵（今の南京市）の「烏衣巷」は、王氏や謝氏で代表される、東晋の貴族の居住地であつた。「烏衣巷」はあくまでも地名であつて、その貴族たちの着した服の色とは関係ないが、ここは嫁が鳥の新婦の夫が着ていたであろう服の有り様を想像しているのか。あるいは、別解で示したように、「烏衣」は燕のことであつて、起句に呼応させているのかもしれない。

全 夢舟 塚原周 茨城人 住東京（二首・其二）（十一）

湖天七十二鷗飛

湖天に 七十二鷗は飛ぶ

罨画楼台帯晚暉

罨画す 楼台の 晚暉を帯ぶるを

新婦洲前波窈窕

新婦 洲前に 波は窈窕たり

一奩鏡月逗簾衣

一奩の 鏡月は 簾衣に逗まる

宍道湖の上空をたくさんの鷗が飛んでいく。高い建物が、夕日を帯びた姿はあたかも絵を描いたかのようだ。嫁が鳥の前の波は何ともなまめかしい。化粧箱の中の鏡のようなまん丸い月が簾に何時までもかかっている。

起句は、例えば杜牧の「二十四橋明月夜」（『寄揚州韓綽判官』）や「南朝四百八十寺」（『江南春』）の趣向に倣つたもので、「七十二」に深い意味はあるまい。「罨画」は色をつけた絵（を描くこと）。転句は、前掲の『詩経』周南『閔睢』「窈窕たる淑女」を意識する。

(全) 夢舟 塚原周 茨城人 住東京 二首・其二 (十二)

江城玉笛夢魂飛

江城の玉笛に 夢魂は飛ぶ

翠羽相呼追曙暉

翠羽は 相い呼びて 曙暉を追う

針線無痕誰熨斗

針線 痕無きに 誰か熨斗したる

羅浮春白美人衣

羅浮の 春は 美人の衣に 白し

ある夜の夢。松江城から美しい笛の音が響き渡り、それに引き寄せられて私の魂は飛んでいった。すると、カワセミが羽を輝かせてお互いに呼び合いながら明け方の光をおおっていくのが見えた。針のあとも糸のあともない、仙界の美人の衣に見立てられるような、宍道湖の湖面、まるで誰かが綺麗にアイロンをかけたようだ。その湖面に、仙人のすむ羅浮山に春咲くような、気品のある梅が、白く映えていることよ。

「針線痕無し」。天人の衣服は針や糸をもって縫わず、したがって縫い目のあとがないという。(『太平広記』卷六十八所引『靈怪録』郭翰の条) いわゆる「天衣無縫」。神女にふさわしい服。波一つ無い宍道湖の湖面。結句は不可解。羅浮山は広東省の山。東晋の道士葛洪が仙術の修行をした。梅の名所。「羅浮春」といえば、蘇軾が羅浮山にあやかっつつけた酒の名前として知られる。しかし、酒を注いだり、酒の色が白かったりするのは、ここにそぐわない。春の訪れを告げる、羅浮山(仙界)にあるような梅の花と解してみた。

全 六石 佐藤寛 越後人 住東京(十三)

湖上鴛鴦妬不飛

湖上の鴛鴦は 妬みて飛ばず

青山眉黛清暉

青山の眉黛は 清暉に媚ぶ

嫁時恐被漁娃剪

嫁する時 漁娃に 剪られるを 恐る

一碧雲波無縫衣

一碧の 雲波 無縫の衣

湖に浮かぶおしどりは、美人の化身である六道湖の美しさを妬み、自らが劣る姿をさらすのをいやがって飛ばうとしない。眉の形のようなだらかな青い山、それは美人の顔を髣髴とさせるが、清らかな日の光に恋の視線を送っているようだ。この神女が結婚するとき小姑の漁師の娘にいたずらで切られてしまわないかしら。六道湖一面の緑色の雲のかかった波、つまり縫い目のない仙界の衣が。(漁船が湖面を横切ることをいうか)

「眉黛」は黛(まゆずみ)で眉を描くことから、結局眉と同じ。眉のアーチ型のような山々を言うのであろう。「無縫」は上述の「天衣無縫」。

全 霞庵 関沢清修 羽後人 住東京(十四)

大仙山上白雲飛 大仙 山上に 白雲は飛び

新婦嶼辺紅旭暉 新婦 嶼辺に 紅旭は暉る

松下詩碑今落得 松下の 詩碑 今落得せり

莫教漁叟挂蓑衣 漁叟をして 蓑衣を掛け 教むる莫れ

大山の上空に白い雲が飛んでいる。一方嫁が島あたりには紅い朝日が輝いている。このすばらしい景色の中、嫁が島の松の根元に、『碧雲湖棹歌』の詩碑が今日落成した。漁師たちが蓑を掛けることのないように気をつけてください。

軽い冗談であろう。風光明媚な風景の中、漁の盛んな六道湖のさまを思い浮かべている。

全 夢香 上真行 京都人 住東京(十五)

載酒扁舟興欲飛 酒を 扁舟に 載すれば 興は飛はんと欲す

湖山一角入斜暉 湖山の 一角に 斜暉は入る

雲光澹曳大仙帶
うんこう 澹く曳く 大仙の帯
 松氣碧凝新婦衣
しょうき 碧に凝る 新婦の衣

小舟に酒を載せて宴をもよおせば、天にも昇るようなおもしろさ。湖の周りの山の一部に夕日の光が差す。輝く雲が薄く延びて、大山に仙人の帯のようにかかっている。嫁が鳥の松から発する気が透明な緑色に固まって、新婦の衣のようだ。

全 碧堂 田辺華 備中人 住東京(十六)
 打起鶯兒蘆上飛
とろじ 鶯兒を 打起して 蘆上に飛ばしむ
 飛時秋水蕩斜暉
とろかみ 飛ぶ時 秋水は 斜暉を蕩らす
 盧家少婦慣不見
ろか 盧家の 少婦は 慣れて見ず
 傍我船頭浣紵衣
わが 船頭に 傍いて 紵衣を浣う

私の乗った舟に追い立てられて、鶯たちが蘆の上を飛んでいく。飛んでいくとき、秋の気配の濃い水面に映った斜陽が大揺れになった。中国の美人莫愁のごときこの若い嫁さんは、こんな光景には見慣れてしまつて振り向こうともしない。私の舟の舳先のそばで麻の服を洗い続けている。という嫁が鳥の見立て。

「打起」は「精神を打起す(奮い起こす)」のような言い方を意識した用語か? 「盧家少婦」は梁武帝『河中之水歌』「……洛陽女兒名は莫愁……十五嫁与す盧家の婦」が直接の典故だが、この故事を利用して、放蕩な夫のために孤閨をかこつ妻の物語に換骨奪胎した、王維『洛陽女兒行』の末尾「誰か憐れまん越女の顔玉の如きを、貧賤にして江頭に自ら衣を浣う」を意識しているであろう。その方が嫁が鳥伝説の悲劇のヒロインにふさわしい。また、『唐詩選』にも所収の、沈佺期『古意』に、「盧家の少婦鬱金堂……誰か為に愁いを含む独不見」とある。但し「独不見」は、

樂府題。

全 天游 井原昂 土佐人 住東京(十七)

碧雲湖上白鷗飛

碧雲 湖上に 白鷗飛ぶ

枕水樓台映落暉

水に枕む 樓台は 落暉に映ず

風景依稀猶在夢

風景は 依稀として 猶お夢に在るがごとし

半天烟雨一簑衣

半天の 烟雨 一の簑衣

宍道湖に白いカモメが飛んでいる。水に臨んだ高樓が落日に映えている。この風景はぼんやりとしていてなんだか夢の中の世界にいるようだ。空半分もやががかって雨のそほ降る中、簑をかぶっている漁師がひとりぼっちで舟に乗っている。

「枕」は、あたかも人がまくらに寄りかかるように隣接すること。多く水に対して用いる。「依稀」はかすかなさまを示す疊韻の擬態語。この詩に限らず、結句に「簑衣」を用いる詩は、柳宗元『江雪』『千山鳥の飛ぶは絶え、万径人の踪は滅す。孤舟簑笠の翁、独り釣る寒江の雪』の世界を意識しているようである。

全 龍峰 安廣胖 豊後人 住東京(十八)

碧雲湖上碧雲飛

碧雲 湖上に 碧雲飛ぶ

鏡面明清鑑夕暉

鏡面は 明清にして 夕暉を鑑す

一抹流霞粲如綺

一抹の 流霞は 粲として綺の如し

裁為新婦靜粧衣

裁ちて為す 新婦 靜(靚) 粧の衣に (「靜」疑うらくは当に「靚」に作るべし)

宍道湖、雅名碧雲湖に碧雲が飛ぶ。鏡のような水面は明るく清らかで夕日をはつきりとうつしている。一筋の流れる夕焼け雲は燦々と輝いてあやぎぬのようである。裁断して新婦に嫁が島の美しい衣裳に仕立てているといったあんばい。

李白『観元丹丘坐巫山屏風』「翠屏丹崖は粲として綺の如し」。「静粧」はおそらく「靚粧」の間違い。例えば、蘇軾『梁山泊見荷花憶吳興五絶』第四首「飛蓋靚粧客を迎えて笑う」。

全 南洋 坂井重季 土佐人 住東京（十九）

日催新婦水禽飛

ひび 新婦を 催して 水禽は飛ぶ

暮雨朝雲又麗暉

暮雨 朝雲 又麗暉

天下名湖誰得写

天下の 名湖は 誰か写すを得ん

漪漣碧織嫁時衣

漪漣 碧もて織る 嫁する時の衣

さあ美しく着飾つて恋をしなさいと、水鳥が飛んで嫁が島の神女を毎日促しているのか。暮れには雨、朝には雲、さらにうららかに輝く真昼の太陽というように、次々と変わる宍道湖の風景。天下第一のこの名湖のすばらしさを誰が絵に描くことができよう。嫁が島を囲むさざ波は、透き通つたみどり仕立てた嫁入りの衣裳のようだ。

宋玉の『高唐賦序』で、楚の襄王が幸した巫山の神女が自らを「旦に朝雲と為り、暮れに行雨と為る。朝朝暮暮、陽台の下」と紹介する。これより、「雲雨」は男女の交わりを指す。嫁が島の新婦に神女の恋によって、宍道湖の風景がめまぐるしく変化することを言ったのであろう。

全 香夢 清水直 東京（二十）

湖山牽我夢魂飛

湖山は 我が 夢魂を 牽きて 飛ばしめ

新婦洲頭対晩暉

新婦しんぷ 洲頭しゅうとうに 晩暉ばんきにたい対す

一棹秋風青箬笠

一ひとたび 秋風しゅうふうに 棹ささす 青あおきりゅう箬さ笠

鱸魚膾味在簑衣

鱸魚ろぎょの 膾味かみは 簑衣さいいに在り

湖の周りの山が我が魂を引きつけて、私の夢は宍道湖まで飛んでいく。嫁が島の先っぽで夕暮れの光に向かつている自分。秋風の中、青い竹の皮の笠をかぶって舟に棹さして湖面に浮かぶ。そこで食した鱸魚の刺身のうまいこと、その香りが簑に染みつくほどであった。(と夢から覚めたがなお鱸魚の香りが残っているような気分。私も張翰の故事に倣って、仕事を捨てて宍道湖に行きたいものだ)

転句、結句は張志和『漁父』の「青き箬笠、緑の簑衣」を利用。「箬」は「箬」に同じ。竹の皮。「鱸魚」は、本来は、海の魚のスズキではなくて、淡水魚。四つえらがある。日本漢詩なので魚の種類にこだわる必要はあるまい。西晋の張翰が、秋風が吹くや、故郷の呉に産するこの魚の味を思い起こして、官を辞したという故事で有名。(『世説新語』識鑿)「膾」はなます。

全 雪莊 中田敬義 金沢人 住東京(三首・其一)(二十一)

新婦何曾燕燕飛

新婦しんぷは 何なんぞ曾かつて 燕燕えんえんと飛とぶかごとき

依然容色媚湖暉

依然いぜんとして 容色ようしきは 湖暉こきに媚ぶ

可憐独在蒼波裡

可あわれ憐むし 独ひとり 蒼波そうはの裡うちに 在ありて

渺渺相思曳水衣

渺渺びようびようとして 相思そうしして 水衣すいいを曳くを

新婦すなわち嫁が島は、未だかつて燕がつがいで飛ぶような夫婦の楽しみを味わったことはないが、その美しい姿は湖に照り映える太陽の光に秋波を送っているようなたたずまいをいまなお保っている。ああかわいそうに、ひとり

ぼつちで、青い波の中で、当てのない恋心を抱きながら藻の衣を引いている嫁が鳥の様子よ。

「燕燕飛」は(十)と同様、夫婦仲のよいことの象徴。「水衣」はアオミドロ等の藻。杜甫『重題鄭氏東亭』に「清漣水衣を曳く」。

(企) 雪莊 中田敬義 金沢人 住東京 三首・其二 (二二二)

石翁零唾作珠飛 石翁の 零唾は 珠と作りて飛び

乍墜湖洲璨發暉 乍ち 湖洲に 墜ちて 璨として暉を發す

一碣為留黃絹句 一碣 為に留む 黃絹の句

風流絶勝織弓衣 風流 絶えて勝れり 弓衣を織るに

永坂石球翁の唾のしづくが、真珠の珠となって飛び、忽ちのうちに湖の中洲である、嫁が鳥に落ちてきて、すばらしい光を燦然ときらめかした。(翁の名作『碧雲湖棹歌』が嫁が鳥で壮麗な石碑になったことを讀える) 絶妙なる句を、こうして碑文にして後世まで残してくれた。その風雅は梅堯臣の詩が弓入れの袋に刺繡されたという故事よりもズーとまさっていることはいまでもない。

「黄絹」は、『世説新語』捷語篇の故事を用いる。『曹娥碑』の裏に「黄絹幼婦……」と隱語が書いてあり、曹操と楊修がその解を競い合つた。黄絹は色をつけた糸、従つて「絶」の字、幼婦は少女で「妙」という具合に、「絶妙好辞」(優れた文章)という言葉が隠されていたのである。「弓衣」は歐陽修の『詩話』にある次の話。「蘇子瞻(蘇軾)学士は嘗て涪井監(地名)に於いて西南夷人の売る所の蛮布の弓衣を得。其の文は織つて梅聖俞(梅堯臣)の春雪の詩を成す。……」北宋の詩人梅堯臣の詩が、異民族の弓の袋にまで織り込まれるほど、流行していたというのだ。碑文にする方がこの故事にまさるとは、碑の方が、莊重な品格があつて、未來永劫残るといふことか。結句、「風流の絶勝(拔群にすぐれていること)は弓衣に織らん」または「風流と絶勝(他にぬきんでた名勝地)とは弓衣に織らん」

と訓じて、むしろ、梅堯臣の故事に倣つて、この慶事を異民族までもが弓衣に織り込むことになるだろうという方向の解釈も考えてみたが、どうも収まりが悪いようである。

(全) 雪莊 中田敬義 金沢人 住東京 三首・其三(二二三)

我所思兮神亦飛

我が思う 所よ(兮)

神も亦た飛ぶ

蘭舟何日盪浮暉

蘭舟は

何れの日にか 浮暉を盪らさん

徘徊賞弄湖山景

徘徊して 賞弄す

湖山の景

絲管啁啾洒滿衣

絲管 啁啾として

洒ぎて衣に滿つ(「洒」もと「酒」に作る)

私の思い人(嫁が島神女)よ、魂も穴道湖へと飛んでいく。かぐわしい舟に乗って、何時になつたらあなたと、水に映つて浮いている日の光を、揺らせて遊べることか。あちこち行つて楽しもう、湖の周りの自然を。笛や琴が入り交じつた伴奏が、服いっぱい満ちわたるようなムードの中で。

「所思」は思い慕う相手、恋人。『楚辞』『九歌』「芳馨を折つて兮思う所に遺る」。辞賦文学特有の助字「兮」を用いて、さらに『楚辞』的ムードが強まる。『楚辞』の主題の一つは、神女への愛であり、嫁が島の女神に捧げる歌にふさわしい。「蘭舟」は「舟」の雅名。結句は、杜甫「漢陂行」「絲管啁啾として空翠來る」を利用。「酒」は原文では「酒」に作るが、酒がこぼれて衣に満ちるとするのは唐突な気がする。あるいは、嫁が島に酒を注ぐのかとも思ったが、それも説明不足であろう。「酒」に改めて、音楽が水を注ぐように体全体に響き渡るような感じを述べたものと解釈した。

全 瑜洲 松原新 出雲人 住東京(二十四)

湖天独鶴向西飛

湖天

独鶴

西に向いて飛び

秋入碧雲空落暉

秋は碧雲に 入りて 空しく落暉す

早晚帰休全我志

早晚 帰休して 我が志を全うせん

烟波万里一簑衣

烟波 万里 一の簑衣

六道湖の上空をひとりぼっちの鶴(私の象徴)が西に向かつて飛んでいる。秋の気配が湖の雲の中に立ちこめる中、夕日が見られることもなく空しく落ちていつていっていることであろう。早く今の仕事を辞めて故郷に帰り、年来の宿願を果たしたい。もやのかかった万里も続く波の中、簑を着て一人静かに六道湖に舟を浮かべて悠々自適の日々を過ごすと宿願を。

全 松陵 山口宗義 出雲人 住東京(二十五)

華表前頭一鷺飛

華表の 前頭に 一鷺飛ぶ

水光摇曳映斜暉

水光 摇曳して 斜暉に映ず

秋風先到蒹葭渚

秋風 先ず 蒹葭の渚に

瑟瑟凉吹仙女衣

瑟瑟として 涼しげに吹く 仙女の衣

神社の鳥居の前に一匹の鷺が飛んでいる。水の光がゆらゆらと揺れ続け、夕日と照りあっている。秋風は、他の場所には先んじてアシの茂る渚に入ってきたようだ。ここだけ秋の気配が早くも色濃い。このアシの渚は、嫁が鳥仙女に とっては服のようなもの。そこをさーさーと涼しげに、風は吹き渡る。

「華表」は元来臺や役所の入り口に立てる石柱であるが、日本では神社の鳥居をさす。六道湖付近の神社なら、特定の神社に限る必要はあるまい。承句は、温庭筠「夢江南」の「摇曳して碧雲斜めなり」を換骨奪胎したか。転句は劉禹錫「秋風引」「何れの処よりか秋風至る、蕭蕭として雁群を送る。朝来庭樹に入り、孤客最も先に聞く」を意識

するであらう。

全 学圃 福井繁 東京(二十六)

一双鵞鵒故飛飛

一双の鵞鵒は 故らに飛飛

蘭棹何人趁夕暉

蘭棹 何れの人か 夕暉を趁う

新婦洲迎春水緑

新婦 洲 迎春水緑なり

蘋風染上女兒衣

蘋風 染めて上る 女兒の衣(「衣」はもと「女」に作る。誤植ならん)

一つがいのおしどりが意味ありげに飛び続ける。あたかもひとりぼっちの神女をいらだたせるかのように。湖上でかぐわしい棹をついて、沈み行く夕日を追っていく舟。いったい誰だろう。嫁が島あたり、春の気配が濃い水は綺麗なみどりになった。浮き草をわたつてくる風がそのみどりいろを運んできて、娘の衣を染め上げていくようだ。(嫁が島も草が萌えてきてすっかり春の装いだ)

起句は、杜甫『秋興八首』其八の「清秋の燕子故らに飛飛」を意識する。また同じく杜甫の『秋日夔府詠懷』に「鵞鵒双双として舞う」とある。

全 耕雲 三谷伸 上総人 住東京(二十七)

湖頭目送独鴻飛

湖頭に 目送す 独鴻の飛ぶを

風入蘆花冷暉暉

風は 蘆花に 入りて 暉暉冷やかなり

欲向老漁尋往事

老漁に 向いて 往事を尋ねんと 欲するに

一湾秋雪灑蓑衣

一湾の 秋雪 蓑衣に灑ぐ

湖のそばで、一匹だけで飛んでいく雁の姿を見送っていると、アシの花咲く岸边に風が吹き込んできて、夕日までも寒げに見えることだ。そこにこぎかかった漁師の老人。昔話（嫁が鳥伝説）でも聞いてみようか。と、この入り江全体に、まだ秋なのに早くも雪が降り始め、漁師の簑にも積もってきた。

「鴻」は大型の雁。白鳥ではあるまい。

全 偕楽園酒間和石球先生原韻 仙坡 勝嶋仙 備後人 住東京（二十八）

年来夢向帝都飛 年来 夢は 帝都に 向いて 飛ぶ

訪遍詩家惜落暉 詩家を 訪うこと遍くして 落暉を惜しむ

一片春愁抛底处 一片の 春愁は 底処にか抛げうたん

初梅和雪点吟衣 初梅は 雪に和して 吟衣に点ず

永坂石球翁の夢は、このところ帝都東京に向かって飛んでおられるようだ。あらゆる漢詩人たちを訪ね回って和詩を頼んでおられる。宍道湖に落ちる夕日のすばらしさが詩に残らないのを惜しんでおられるのだらう。宍道湖一面に広がる春の愁いの気分を、表現せぬままにはうっておられようか。（是非とも詩をひねらなくてはならないな）初めで咲く梅が雪と一緒に、詩を吟ずる翁の服に点々と降り注いでいる。

『偕楽園の酒間。石球先生の原韻に和す』。「偕楽園」は言わずとした水戸の公園。梅の名所。状況はよくわからないが、永坂石球臨席の宴と考えた。「落暉」、あるいは晩年ということか。この詩、『碧雲湖棹歌』に関係づけて、無理矢理解釈したが、単に次韻をしただけで、自らの近況と眼前の宴の光景を詠んだだけなのかもしれない。

全 偕楽園席上用石球先生韻各賦 鉄石 大澤真 飛驒人 住東京（二十九）

芳筵偕楽羽觴飛 芳筵 偕に楽しむ 羽觴の飛ぶを

簾外梅花帶落暉
憶到追隨松上夕
松風沙月滿吟衣

簾外の 梅花は 落暉を帶ぶ
憶到す 松上の夕に 追隨し
松風の 沙月 吟衣に満ちたることを

『偕樂園の席上石球先生の韻を用いて各の賦す』。(二十八)と同時に作られたのである。

ここ偕樂園で宴を開いて、我々はまさに「偕に樂しん」で、杯を飛ぶように酌み交わしている。酒席の簾の向こうでは梅の花が咲き、落日に照りかがやいている。それに付けても、思っておこすことだ。詩人たちが永坂先生に連れ立って一緒に宍道湖で遊んだ夕べ。嫁が島の松には風がそよぎ、砂浜には月が照っていた。その風や月光が、詩を吟ずる人たちの衣に充ち満ちていたことだろう。

「偕楽」は「偕樂園」とかけている。起句は、李白『春夜桃李園に宴する序』「瓊筵を開いて以て花に坐し、羽觴を飛ばして而して月に酔う」を利用。「羽觴」は本来雀が羽を広げた形に作った杯であるが、雅語として用いている。後半、作者は松江を来訪したことがないものとして解釈した。

全 小峴 金枝道 東京(二首・其一)(三十一)

孕風帆影疾於飛
隱映湖山明晚暉
回棹不知身入画
無辺嵐翠撲吟衣

風を孕む 帆影は 飛ぶよりも疾し
湖山に 隱映して 晚暉明らかなり
棹を回らせば 知らず 身の画に入るを
無辺の 嵐翠は 吟衣を撲つ

私に乗っている舟の、風をはらんだ帆の影は、飛ぶよりも速く駆ける。明るいつ夕日が湖の周りの山に隠れたり現れたりしている。棹をさして、舟を巡らせると、いつの間にか自分の体が絵の中の世界に入ってしまったかのよう。それ

て、限りなくどこまでも続く、緑の山気が、詩を吟ずる私の衣めがけてぶつかって来るようだ。(というような図が頭に浮かんだ)

「孕風」は和習であろうが、わざとおもしろさをねらって使ったか。「嵐翠」は杜甫『大曆二年九月三十日』「草は敵す虚風の翠なるに、花は禁う冷葉の紅なるに」から。「嵐」は、烈風の「あらし」ではなくて、山に立ちこめる気。

(全) 小峴 金枝道 東京 二首・其二 (三十一)

掬柁淞湾詩思飛 柁を 淞湾に 掬れば 詩思は飛ぶ (「柁」はもと「掬」に作る)

碧雲縹緲送残暉 碧雲 縹緲として 残暉を送る

江山畢竟知誰主 江山は 畢竟 誰か主となるを知らんや

不属王侯属布衣 王侯に 属せず 布衣に属す

(六道湖に船遊びする自分を夢想して) 六道湖の入り江でぎいぎいねじれんばかりに梶を切れば、詩想がわき出て空を飛ぶかのよう。遠くかすかなみどりいろの雲に夕日が暮れていくのを見送る。この川や山、大自然は、結局いつたい誰の持ち物ということになるだろう。王侯貴族のものなどではない、つまらぬ一庶民の私が独占しているのだ。ああ愉快。

「縹緲」は双声疊韻の擬態語。無限定に薄まり広がっていくさま。白居易『長恨歌』「山は虚無縹緲の間に在り」。転句は、蘇軾の『前赤壁賦』「且つ夫れ天地の間、物は各の主有り。……惟だ江上の清風と、山間の明月とは、……之を取るも禁ずる無く、之を用いるも竭きず」を意識するだろう。「知十疑問詞」は「……か知ろうか(かしら)」という疑問。

【附記】

本稿は、二〇〇五年度科学研究費補助金 基盤研究（C）「剪松吟社資料の整理・保存及び同吟社の文学活動に対する実証的研究」（研究代表者 道坂昭廣 課題番号 175220229）に基づく研究成果の一部である。

また、島根大学法文学部山陰研究センター 二〇〇四年度山陰研究プロジェクト「山陰地域伝存の古典籍資料に関する基礎的調査研究」（代表者 蘆田耕一 番号0401）による予備的調査の成果の一部である。

『剪松詩文』の閲覧に便宜を図っていただいた島根県立図書館に感謝申し上げます。

山陰漢詩の研究に私を導いてくださった入谷博士の学恩に感謝申し上げます。